

館林市内遺跡発掘調査報告書
TATEBAYASHI-SHINAI

1991

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

1 9 9 1

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成3年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教育長 堀越 亘（平成3年12月まで）
高瀬利一（平成4年3月より）
教育次長 田村幹男
主管課 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係
文化振興課長 江森勝一
文化財係長 早川紀正
主事 川島孝男（担当）
主事補 岡戸千絵
調査補助員 寺内景子
作業員 飯島富子 石川栄吉 熊木一江
近藤久美子 津田照子 寺内義正
中井貞次 林正行 藤坂江里
松本末吉 山本久江

3. 調査に伴う諸経費は、国及び群馬県より補助金を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録、資料は館林市教育委員会で保管した。
5. 本書の取りまとめは、川島が中心となり行った。
6. 本書の図版作成、トレースは寺内（景）が中心となり行った。
7. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関の御指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

< 目 次 >

例 言	I
目 次	II
図 版 目 次	III
写 真 目 次	
第Ⅰ章 館林市の環境	1
位置と地形	1
時代別遺跡の状況	3
第Ⅱ章 各 遺 跡 の 内 容	5
第1節 清水橋遺跡	5
第2節 萩原遺跡	9
第3節 羽附陣屋跡・陣谷遺跡	14

< 図 版 目 次 >

第1図 館林市の地形と調査された遺跡	2
第2図 城館址と住居址の確認された遺跡	4
第3図 清水橋遺跡周辺図	5
第4図 レンチ配置図	8
第5図 萩原遺跡周辺図	9
第6図 遺構配置図	13
第7図 羽附陣屋跡・陣谷遺跡周辺図	14
第8図 羽附陣屋略測図	15
第9図 羽附陣屋跡・陣谷遺跡遺構配置図	21

＜写 真 目 次 ＞

写真 1	清水橋遺跡調査前	6
写真 2	" 重機による掘削	6
写真 3	" 調査風景	6
写真 4	" 土坑調査風景	7
写真 5	" 調査区全景	7
写真 6	" 土坑	7
写真 7	" 1 レンチ	8
写真 8	" 2 レンチ	8
写真 9	萩原遺跡調査前	10
写真 10	" 重機による掘削	10
写真 11	" 調査風景	10
写真 12	" 調査区全景	11
写真 13	" 1 号溝	11
写真 14	" 2 号竪穴状遺構	11
写真 15	" 2 号溝、3 号溝及び 1 号竪穴状遺構	12
写真 16	" 1 号溝	12
写真 17	羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査前	15
写真 18	" 重機による掘削	16
写真 19	" 調査風景	16
写真 20	" 調査区全景	16
写真 21	" 調査区全景	17
写真 22	" 2 レンチ	17
写真 23	" 1 号土坑	17
写真 24	" 2 号土坑土層断面	18
写真 25	" 2 号及び 3 号土坑	18
写真 26	" 4 号土坑	18
写真 27	" 1 号溝	19
写真 28	" 出土遺物	19
写真 29	" 調査区中央部	20
写真 30	" 3 号溝	20

第Ⅰ章 館林市の環境

位置と地形

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺近くに位置する総面積60km余り、人口約77,000人を擁する当地方の中核都市である。市域は東西15km、南北8kmと東西に長く、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊水池で茨城県に、南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県に、西は邑楽郡邑楽町とそれぞれ接している。また、県都前橋市まで約50km、首都東京までは東武鉄道伊勢崎線で浅草まで約65km、東北自動車道では館林インターから都心まで60km余りと、首都圏との結びつきも強い。

次に地形的に本市を概観すると、洪積地（洪積台地・内陸古砂丘）と沖積地（自然堤防・沖積低地・湿地・池沼・河川等）に大別され、県下では最も地盤の低い地域に属している。

本市中央部を東西の帶状に延びる台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市の高林から大泉町、邑楽町を経て館林市に達し、更に東の板倉町へと続く洪積台地で、本市における標高はおよそ18m～25mである。その構成を見ると、河川の堆積物とされる礫、砂、シルトの互層の上に、中部及び上部ロームの2層が埋積し、形成時期は下末吉海進時に遡るとされている。

また、この台地の西側から北側の縁に沿って、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）が走っている。幅約200m、洪積台地からの比高は5m前後で、大泉町古海から本市の高根に至る約13kmにわたっており、本市の最高点はこの埋没河畔砂丘上にある。形成時期については、やはり下末吉海進時からその後の海退の時期に遡るといわれ、内陸部におけるわが国最古のものである。

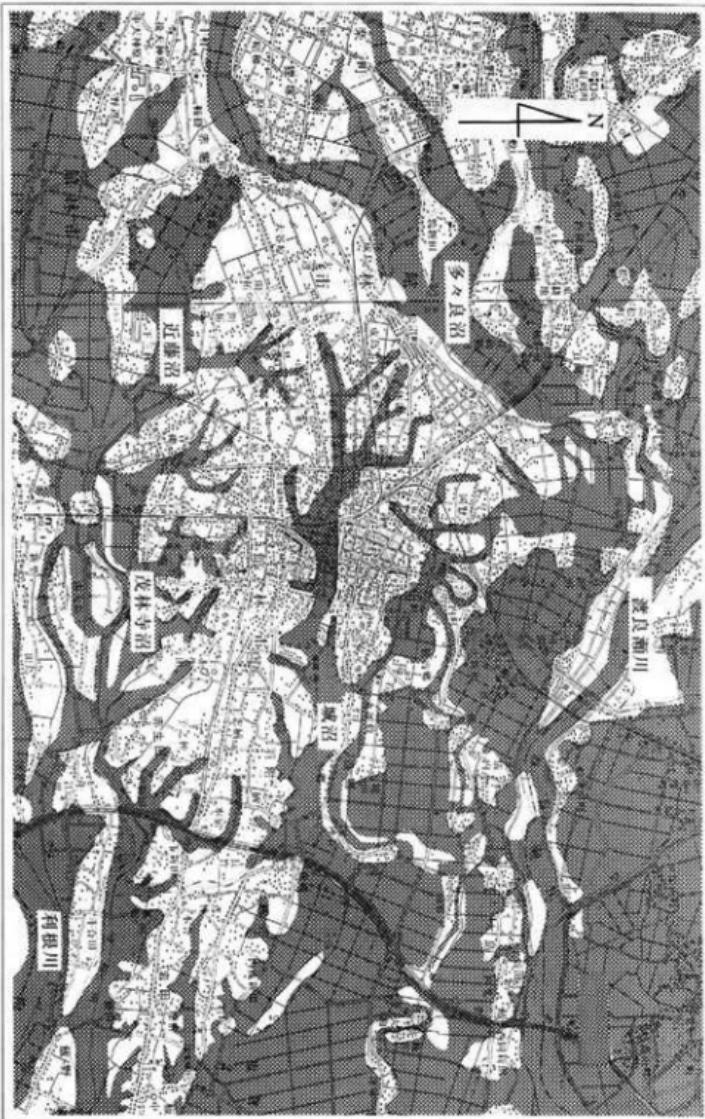
そして、この「邑楽・館林台地」を取り囲むように、利根川及び渡良瀬川の氾濫原である標高14m～16m前後の沖積地が広がっている。この沖積地を区分すると、北部の渡良瀬川沿岸地帯、南部の利根川沿岸地帯の2地帯に分けることができる。この沖積地には広大な後背低地が広がり、大小の低湿地が点在していた。また、この中に残る旧河道に沿って、自然堤防が発達している。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向けて緩く傾斜し、台地面と低地面との比高差も北部で大きく南部で小さいという傾向にあり、これは、埼玉県の北東部を中心を持つ関東造盆地運動の影響によるものと考えられる。

洪積台地はまた、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。その中でも市内最大の谷は鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分し、更に深い谷が延びている。こうした洪積台地を開析する谷には、ほかに茂林寺沼、蛇沼等の池沼を伴うものなど大小様々なものがあり、本市景観上の特徴の一つになっている。

第1図 鮎林市の地形と調査された遺跡

- ① 清水橋遺跡 ② 萩原遺跡 ③ 羽附陣屋跡・陣谷遺跡



時代別遺跡の状況

館林市内における遺跡の分布調査は、昭和13年の「上毛古墳綜覧」をはじめ、昭和38年刊行の「群馬県の遺跡」、昭和46年刊行の「群馬県遺跡台帳」、更に昭和63年に「館林市の遺跡」としてまとめられた計4回が行われている。昭和58年から63年にかけて実施された市内遺跡詳細分布調査の結果である「館林市の遺跡」には、144カ所の遺跡が推定され、内訳は、旧石器時代—3、縄文時代—13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代—0、古墳から平安時代を含むもの—96（うち縄文時代の遺物散布の見られるもの23）、古墳—17（推定を含み延べ25基）、中世生産址—1、中世城館址—12（伝承地を含む）、近世城館址—2となっている。

次に、「館林市の遺跡」を基に、各時代ごとの遺跡の分布状況を概観すると、旧石器時代の3遺跡は、内陸古砂丘及び洪積台地に分布している。

縄文時代では、後・晩期の遺跡数が少なく、立地は前・中期が台地上の平坦面に多く、後・晩期になると台地斜面から微高地となっている。

弥生時代の遺跡数は本市では0となっているが、昭和45年に調査された赤生田道溝遺跡は、古墳時代のごく初期、弥生時代からの移行期のものと考えられている。

古墳時代の遺跡は、前期が台地斜面から微高地、中期が斜面から台地上、後期は台地上という傾向が見られ、古墳は低地を見下ろす台地上に造られている。

奈良時代になると、遺跡の立地は台地の縁辺から台地内部へと広がりが見られ、平安時代では遺跡数も急増し、更に台地内部から、舌状台地、自然堤防上にも分布が見られて来る。

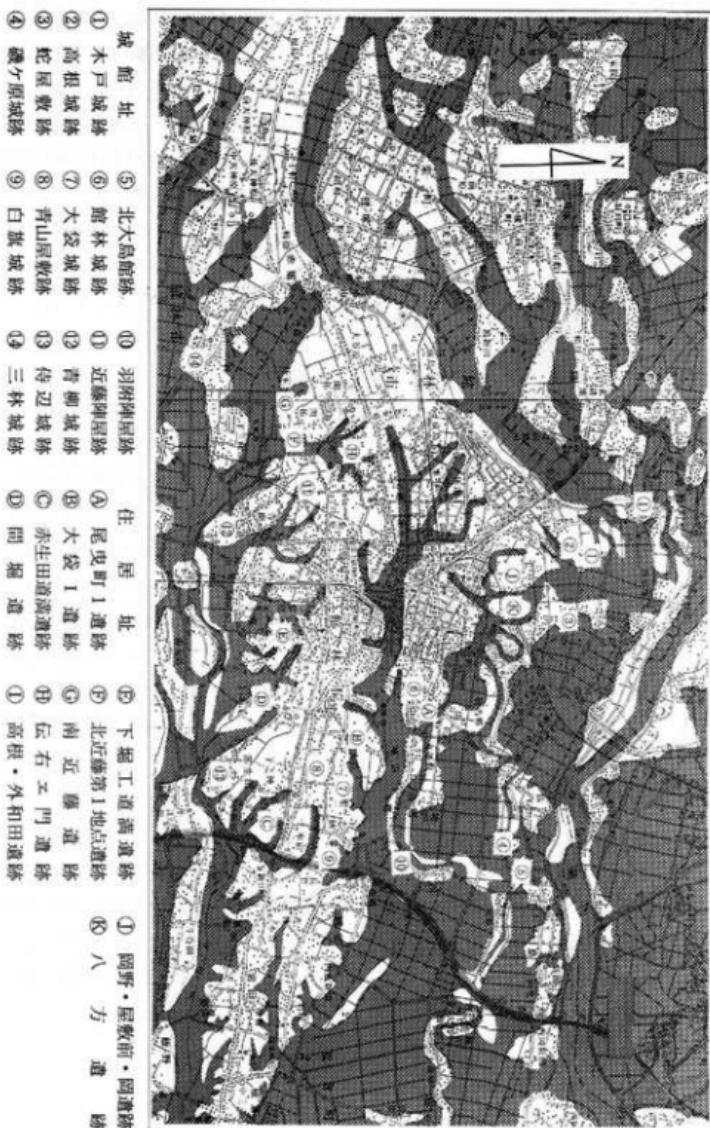
中世では遺物の散布のみで遺跡と捉えることのできるものが少なく、中世の生産址として鉢津散布の見られる多々良沼遺跡を除くと、今年度調査された羽附陣屋跡など城館址12カ所が推定され、その多くが、低湿地や池沼に面する台地上に立地している。近世に入ると、やはり城館址として館林城跡、近藤陣屋跡がある。

これらのことから窺える遺跡分布上の一つの特色として、縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代の初期にかけて遺跡数の少ないことを挙げることができる。

しかし、「館林市の遺跡」は、遺物散布地にその立地条件を加味し、遺跡としての可能性を推定したもので、遺跡として確定するには発掘調査の結果に拠らねばならない。

これまでの発掘調査により住居址は11遺跡で確認され、調査の結果による遺構の主なもので時代別に分けると、縄文時代の大袋Ⅱ、間堀、岡野・屋敷前・岡、古墳時代では、初期の赤生田道溝、それ以後の伝右エ門、高根・外和田、八方、北近藤第一地点、奈良時代の南近藤、古墳時代以降と推定される尾曳町、平安時代の可能性を持つ下堀工道溝遺跡などがある。

第2図 城館址と住居址の確認された遺跡



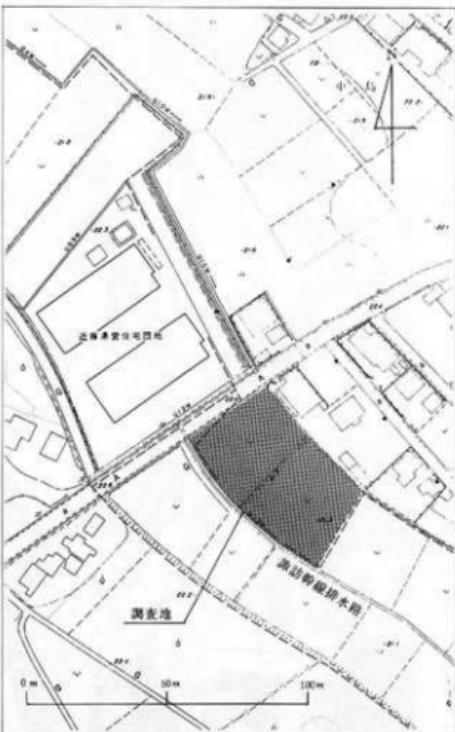
第Ⅱ章 各 遺 跡 の 内 容

第1節 清水橋遺跡（しみずばしいせき）

立 地 と 環 境

清水橋遺跡は、本市の南部、旧東沼から北方へ邑楽・館林台地を開析する3本の谷のうち、中央の現勘幹線排水路を中心とする谷の谷頭から南東に広がる遺跡で、「館林市の遺跡」には、平安時代の埋蔵文化財包蔵地として登載されている。付近は、近藤県営住宅団地をはじめ宅地化が進行しているほか、近年では国道354号線バイパスの部分開通など、開発の著しい地域である。

周辺の遺跡としては、中島遺跡、大塚遺跡、中堤遺跡があり、いずれも平安時代の埋蔵文化財包蔵地となっている。このほか、3本の谷のうち西側の現苗木幹線排水路を中心とする谷の周辺には、縄文及び平安時代の萩原遺跡、奈良及び平安時代の青柳中島遺跡、城館址として近藤陣屋跡がある。東側の現宮田2号幹線排水路を中心とする谷には、この谷に関連するとと思われる埋蔵文化財包蔵地は推定されていない。既往の発掘調査では、国道354号線バイパス建設工事に伴う中島遺跡、個人住宅建設に伴う中堤遺跡の調査が行われ、中島遺跡で溝状遺構等が検出されたほかは、いずれも住居址などの遺構は確認されていない。



調 査 の 概 要

清水橋遺跡の調査は、館林市大

第3図 清水橋遺跡周辺図

字小桑原字大道西1038-1の地権者
松村平治氏の一般開発に伴う事前
確認調査であった。

館林市教育委員会では、松村氏
より同地開発に伴う埋蔵文化財の
取り扱いについての問い合わせを
受け、協議を始めるとともに現地
確認を行った。

開発予定地は、近藤県営住宅団
地の南東に面する畠地で、勘訪幹
線排水路の北側に隣接し、排水路
下流の南東へ向かう緩い下り傾斜
となっていた。現地での遺物散布
は確認できなかったものの、周辺
では見られ、また、既往の発掘調
査例がなく、遺構の存否、土地改
変の有無など、地下の状況把握が
望ましいと判断された。この結果
に基づく再協議を行い、試掘調査
を実施することで了解を得た。

調査は、遺構等の確認と、遺跡
の広がる谷の埋積状況把握を合わ
せて行うことを目的とし、勘訪幹
線排水路に平行する1トレンチと、
これに直行する2トレンチの2本
を十字形に設定した。ともに2m
幅で、重機による表土剥ぎから開
始した。

この結果谷の埋積については、
2トレンチの断面から、谷底であ
ったと考えられる現勘訪幹線排水
路へ向かう斜面が、自然堆積によ

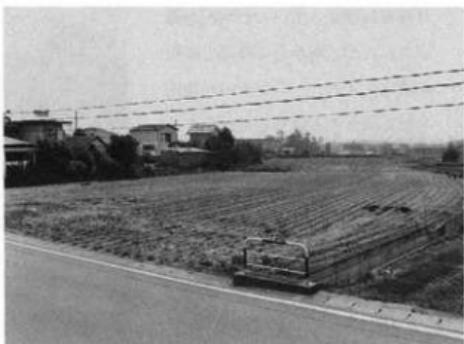


写真1 清水橋遺跡調査前



写真2 清水橋遺跡重機による掘削



写真3 清水橋遺跡調査風景

り徐々に埋まっていた状況が確認されたが、折からの降雨と多量の湧水により、トレンチ内の地山を縦て追うことはできなかった。確認できた表土及び埋積土の厚さは、薄い部分で0.3m、厚いところでは1.4mに達し、更に厚いものと思われる。また、開発予定地は、かつて谷の斜面であったところを耕作地としたため削平を受けており、台地上であったと思われる1及び2トレンチの交差付近より北側では、ローム面を削平する土地改良等の土地改変のあった様子が窺われた。

遺構については、1トレンチ東寄りに土坑が1基検出された。当初この土坑は、トレンチ内にその一部が認められたため、溝あるいは土坑など、遺構の形状、範囲を確定するため、トレンチを拡張した。その結果、東西に長軸を持つ不整形な梢円を呈する土坑で、断面形は椀状となっており、規模は $2.7\text{ m} \times 1.9\text{ m}$ 、深さは1.0mであることが確認された。覆土はほぼ均一の黒色土で、遺物の検出はなく、構築年代、性格は比定し得ず、落し穴等に伴う埋設物を固定した形跡は見られなかった。

遺物としては、繩文土器片、土師質土器片等若干が出土した。



写真4 清水橋遺跡土坑調査風景



写真5 清水橋遺跡調査区全景

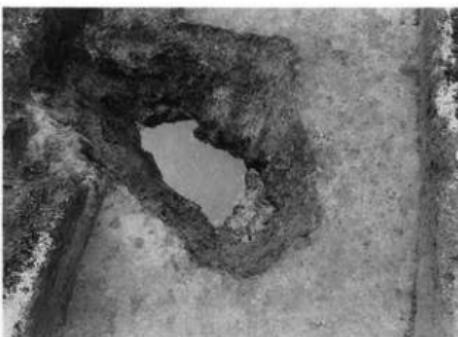


写真6 清水橋遺跡土坑

第4図 清水橋遺跡トレンチ配置図

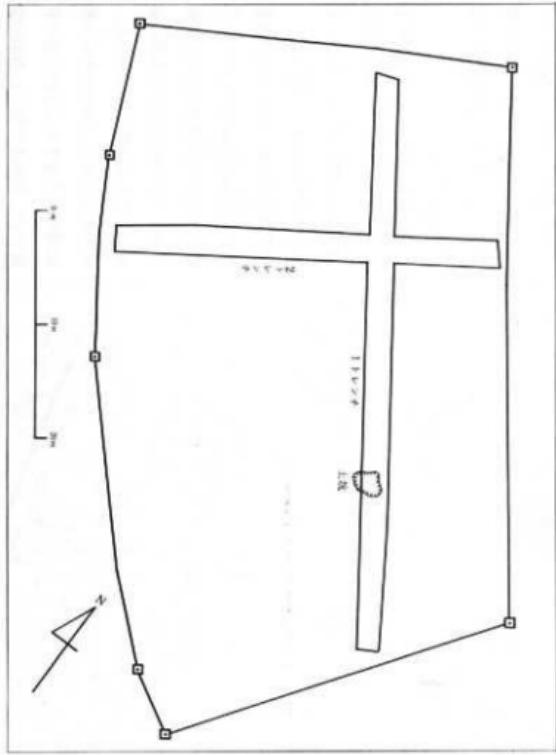


写真7 清水橋遺跡1 トレンチ



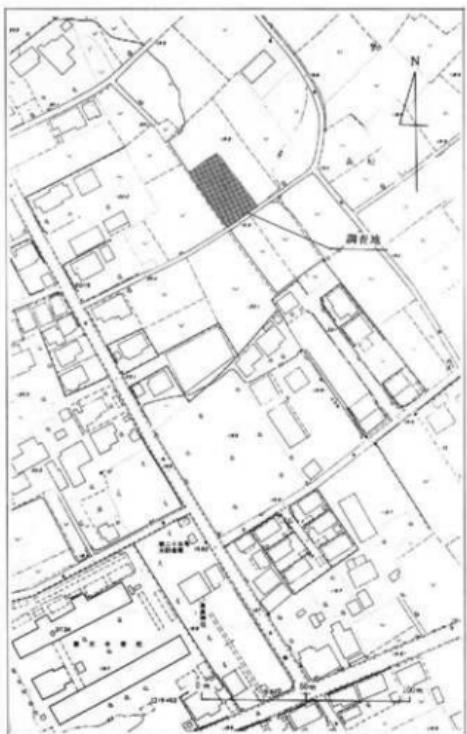
写真8 清水橋遺跡2 トレンチ



第2節 萩原遺跡（はきわらいせき）

立地と環境

萩原遺跡は、本市の南部、館林市立第三中学校周辺から北方へ広がる遺跡である。東は、前節で述べた旧東沼から邑楽・館林台地を開析する3本の谷のうち、西側の現苗木幹線排水路を中心とする谷に、西は近藤沼へ落ち込む低地に挟まれた低台上に立地し、「館林市の遺跡」には、繩文及び平安時代の埋蔵文化財包蔵地として登載されている。当遺跡は、国道122号線にも近く、付近は人口増加の著しい、宅地化の進んでいる地域である。周辺の遺跡としては同じ台地の西側に古墳及び平安時代の苗木遺跡、平安時代の苗木西遺跡、北及び東は前述の谷を挟んで奈良及び平安時代の青柳中島遺跡、南には中世城館址である青柳城跡がある。



第5図 萩原遺跡周辺図

開発予定地は、遺跡地の中央やや南寄りに位置し、台地の東側斜面上で畠地となっていた。

調査の概要

萩原遺跡の調査は、館林市大字青柳字萩原1853-6における鎌田晴子氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、鎌田氏の代理人より同地における埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせを受け、協議を開始した。

開発予定地は、苗木幹線排水路へ下る緩斜面上にあり、昭和59年に行われた分布調査で遺物が確認され、今回の開発に伴う現地確認においても遺物散布が見られた。以上のことから、開発に先立つ確認調査を実施することが必要と判断され、再協議の結果、事前の試掘調査を行い、本調査については

試掘調査の結果に基づき協議することで合意された。

調査は、遺構の有無確認を目的として実施された。開発地内に幅2mの平行するトレーナー2本を設定し、重機による掘り下げから開始した。

その結果、表土の厚さは0.1～0.3mで、西から東へ傾斜している調査地を削平した様子が見られた。削平はローム層に達するものであった。また、戦後間もなく開墾されるまで松林であったということもあり、開墾時の抜根痕、その後の農耕用のものと思われる掘り込みなど、随所に擾乱が見られた。検出された遺構には、3条の溝状遺構と2基の竪穴状遺構があり、遺物としては、若干の縄文土器片、土師質土器片が出土した。調査の進行に伴い、検出された溝状遺構等の範囲を確認するため、2トレーナーを拡張した。

確認された3条の溝状遺構は、便宜上北から1号溝、2号溝、3号溝とした。1号溝は、調査地を東西に横切るように南西から北東へと苗木幹線排水路を中心とする谷にはほぼ直行するように走っていた。東側は更に隣接地へ、西側も擾乱により確認できなかったものの隣接地へ延びているものと推定



写真9 萩原遺跡調査前



写真10 萩原遺跡重機による掘削



写真11 萩原遺跡調査風景

される。2号及び3号溝は、ともに2トレンチ内に起点を持ち、1号溝とほぼ平行するように東へ延び、隣接地へ続いていた。確認できたこれらの溝状遺構の規模は、
1号溝—長さ11.8m、幅0.8m、
深さ0.3m
2号溝—長さ5.3m、幅0.87m、
深さ0.15m
3号溝—長さ4.4m、幅0.54m、
深さ0.07m

となっており、特に1号溝は、深さで2号及び3号溝の2倍以上、断面形においては箱堀様を呈し、意図的掘削を思わせる遺構であった。いずれも構築年代、性格を比定し得る遺物の出土はなかった。

2基の堅穴状遺構については、いずれも長方形の帶状を呈し、溝状遺構とほぼ平行していた。北から1号堅穴状遺構、2号堅穴状遺構とし、確認されたそれぞれの規模は、

1号—長さ2.9m、幅0.57m、
深さ0.12m
2号—長さ2.2m、幅0.71m、
深さ0.16m

となっており、溝状遺構同様、構築年代、性格を比定し得る遺物の出土はなく、溝状遺構との関係は不明である。



写真12 萩原遺跡調査区全景



写真13 萩原遺跡 1号溝(東から)



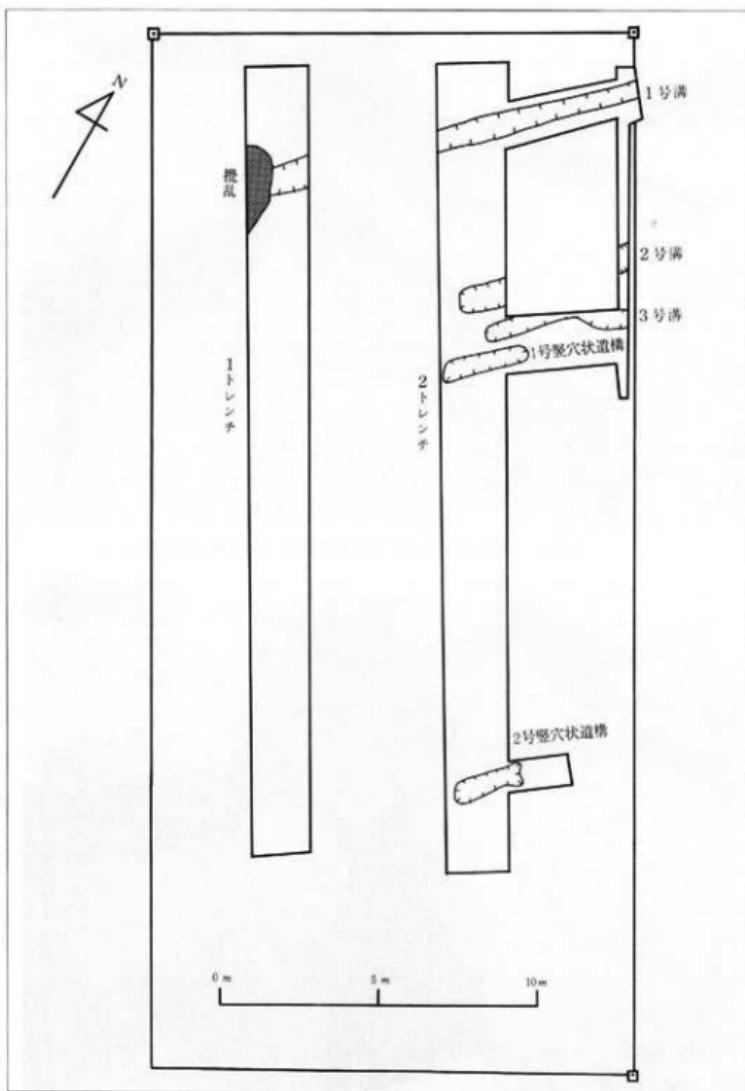
写真14 萩原遺跡 2号堅穴状遺構



写真15 萩原遺跡 2号溝, 3号溝及び1号竪穴状遺構(奥から)



写真16 萩原遺跡 1号溝(西から)



第6図 萩原遺跡遺構配置図

第3節 羽附陣屋跡・陣谷遺跡（はねつくじんやあと ・じんやいせき）

立地と環境

羽附陣屋跡・陣谷遺跡は、「館林市の遺跡」では、古墳から平安時代へかけての埋蔵文化財包蔵地である陣谷遺跡と、中世城館の伝承地羽附陣屋跡との複合遺跡となっている。立地としては、城沼の北岸沿いを東西に延びる洪積台地の東端に位置し、北西部を除いた遺跡の周囲は城沼東岸から赤生田川へかけて広がる低湿地に囲まれている。付近は田畠に囲まれたのどかな田園地帯となっているが、遺跡地の西側には県道山王・赤生田線、東には東北自動車道がともに南北に走り、南には低地中を東西に県道板倉・穂谷・館林線が通っており、城沼周辺のリゾート開発計画もあることから、将来的な開発の見込まれる地域である。周辺の遺跡には、同じ台地の北西に古墳から平安時代の当郷遺跡、北側の自然堤防上にはとともに古墳及び平安時代の道祖神遺跡、村前遺跡があり、南の低地を挟んだ台地上には、中世城館址である白旗城跡をはじめ古墳時代の町谷1遺跡、平安時代の町谷3遺跡、縄文時代の下志柄遺跡がある。

調査の概要

羽附陣屋跡・陣谷遺跡の調査は、館林市楠町字陣谷3835-4における同地の地権者半田明治氏の個人住宅建設に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、半田氏の同地における農地転用許可申請に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせを受け、協議を開始するとともに現地確認を行っ



第7図 羽附陣屋跡・陣谷遺跡周辺図

た。

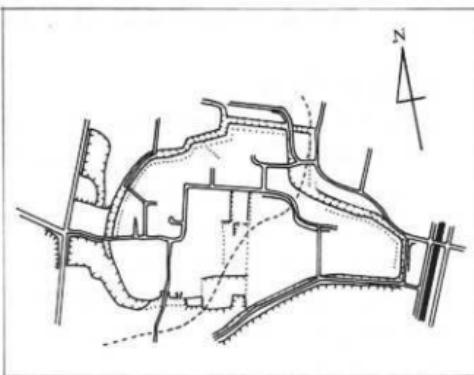
開発予定地は、遺跡地の中央からやや東に寄った、台地の北側斜面上に立地し、北辺は比高1.5m程の崖となっていた。同地は耕作地として斜面を削平し、北側は崖として整形される土地改変を受けた様子が窺われ、ほぼ全面にわたって遺物の散布が見られた。「群馬県の中世城館跡」(群馬県教育委員会 19

88) 所収の「羽附陣屋 略測

図」(第8図)によれば、開発予定地北側の崖は、羽附陣屋の城館址遺構に伴うものである可能性が考えられ、遺物の散布状況、既往の調査例のないことを合わせ、事前の確認調査が必要であると判断された。以上のこと踏まえ再協議を行った結果、事前の確認調査を実施することと了解された。

調査は、陣谷遺跡としての遺構の有無と、羽附陣屋に伴う城館址としての遺構確認を目的とするものであった。斜面であったと考えられる調査地の整地状況を確認するため、南北に平行するトレンチ2本を設定し、重機により掘削を開始した。調査の進行に伴い、2トレンチの南寄りに、幅2m前後の溝状の遺構及び覆土に焦土を含む土坑が認められたため、両トレンチに挟まれた南側半分に調査区を拡張した。

その結果、確認された遺物としては、縄文土器片、古墳から中世にいたる土師質土器片、須恵器片のほか、磨製石斧、凹石等若干の石器類などパンケースに3箱分が出土した。遺構としては、3条の溝状遺構及び4基の土坑、掘立て柱遺構と想定されるピット群、堅穴式住居の一部を思わせる遺構が認められた。しかし、土層の状況から、調査地ではほぼ全面がロー



第8図 羽附陣屋略測図(群馬県教委「群馬県の中世城館跡」)



写真17 羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査前

ム層を削平する土地改変を受け、特に北側半分では大規模な削平のあった様子が確認された。また、削平されたローム面上の埋土は、調査区全域にわたってほぼ同一で、人為的に埋められたものと考えられた。この埋土がどこから運び込まれたものかは不明であるが、縄文・古墳時代から中世にわたる出土遺物も、そのほとんどがこの埋土の中からほぼ均一に出土しており、埋土に含まれていたものと解された。調査地における削平と埋め立ての関係は明らかではないが、掘立て柱及び堅穴式住居を想定させた遺構は、ともにこの削平により大半を削られていた。調査区全体にわたり、遺構の築造時期、性格を比定し得る遺物の出土は見られなかった。

溝状遺構

確認された3条の溝状遺構は、便宜上西から1号溝、2号溝、3号溝とした。1号溝は、調査地の西から入り、1トレンチ南端では直角に北へ曲がり、直線的に延びている。2号溝は、調査地の南から入り、拡張した調査区の南寄りで1号溝同様直角に東へ折れ、3号溝を横切る形で更に東へ延びている。3号溝は、2号溝と



写真18 羽附陣屋跡・陣谷遺跡重機による掘削



写真19 羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査風景



写真20 羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査区全景(西から)

同じく調査地の南から入り、2トレンチ中央部の2号及び3号土坑付近で途切れていた。これは調査地北側半分の大規模な削平によるものと思われる。いずれも構築時期、性格を比定し得る遺物の出土はなく、最大幅2mに及ぶ3号溝も、羽附陣屋との関連は不明である。確認できたこれら溝状遺構の規模は次のとおりである。

1号溝—長さ12.2m、幅0.5m、

深さ0.34m

2号溝—長さ7.1m、幅0.5m、

深さ0.11m

3号溝—長さ11.2m、幅1.8m、

深さ0.55m

土 坑

検出された4基の土坑は、總て2トレンチ内で確認され、北から1号土坑、2号土坑、3号土坑、4号土坑とした。1号土坑は、大規模な土地改変の下から検出され、全容は明らかではない。2トレンチ中央の2号土坑は袋状を呈し、覆土は、焦土とロームブロックの均一な混合土で、奈良・平安期のものと推定される土師質の土器片を伴っていた。埋土は、均一な混合土一層であったことから、短時間の間に人為的に埋められたものと思われる。壁面には、燃焼に伴う土質の変化は見られず、また、



写真21 羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査区全景(南から)



写真22 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 2トレンチ

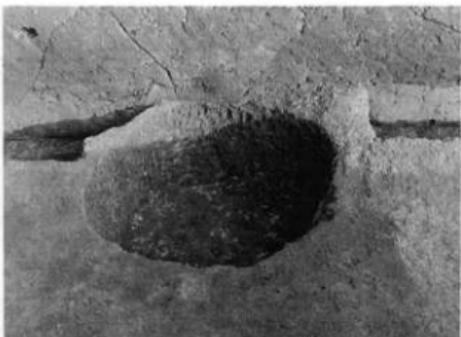


写真23 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 1号土坑



写真24 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 2号土坑土層断面



写真25 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 2号及び3号土坑

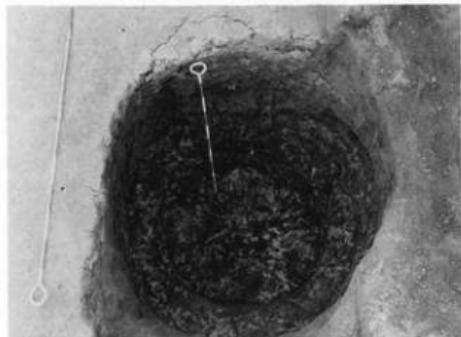


写真26 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 4号土坑

平面プランの検討からも、住居址に伴うものとは考えにくい。3号土坑は、2号土坑の西側に隣接して検出された。また4号土坑は、2トレンチ南端で確認され、底面から25cm程の垂直な立ち上がりを持った袋状であった。2号土坑を除く3基の土坑は、いずれも構築時期、性格を比定し得る遺物の出土はなかった。確認できた4基の土坑の規模は次のとおりである。

- 1号土坑一径0.9m、深さ0.4m
- 2号土坑一径0.7m、深さ0.55m
- 3号土坑一径0.6m、深さ0.4m
- 4号土坑一径1.2m、深さ1.2m

掘立て柱遺構

拡張した調査区の北寄りにビット群が確認された。その配列、間隔に一定の規則性の見られるものがあったが、3号溝及び削平による擾乱によって全体を確認することはできなかった。

竪穴式住居

竪穴式住居址は、拡張した調査区の北寄り、ビット群を斜めに切るよう、西壁の一部及び壁溝様の小規模な溝状遺構が検出されたことにより想定された。しかし、縄文・古墳時代から中世へいたる土器片を含む覆土はほぼ一層で、人為的に埋められたものと推定され、また、床面と考えられる部分

も大半が大きな擾乱を受けていることから、大規模な削平に伴うものとも考えられる。

今回の調査により検出された遺構の中で、構築時期を比定し得る遺物を伴うものは見られなかった。これは調査地における大規模な土地改変によるものと考えられるが、この土地改変と、伝承の中世城館址羽附陣屋との関連については不明であり、最大幅2mに及んだ3号溝をはじめ他の遺構と合わせ、今後の追調査を待ちたい。

なお、羽附陣屋についての言い伝えとしては、永享の乱(1438年)に続く、関東の動乱の中で起こった羽総原（館林市旧大字羽附付近と推定される）の合戦に関するものがある。

この合戦は、足利成氏感状等の古文書にも見え、長禄3年(1459)、古河公方といわれた足利成氏の軍と、堀越公方といわれた足利政知方の上杉軍とが武力衝突した事件で、この時成氏方が布陣したのが羽附陣屋といわれている。



写真27 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 1号溝



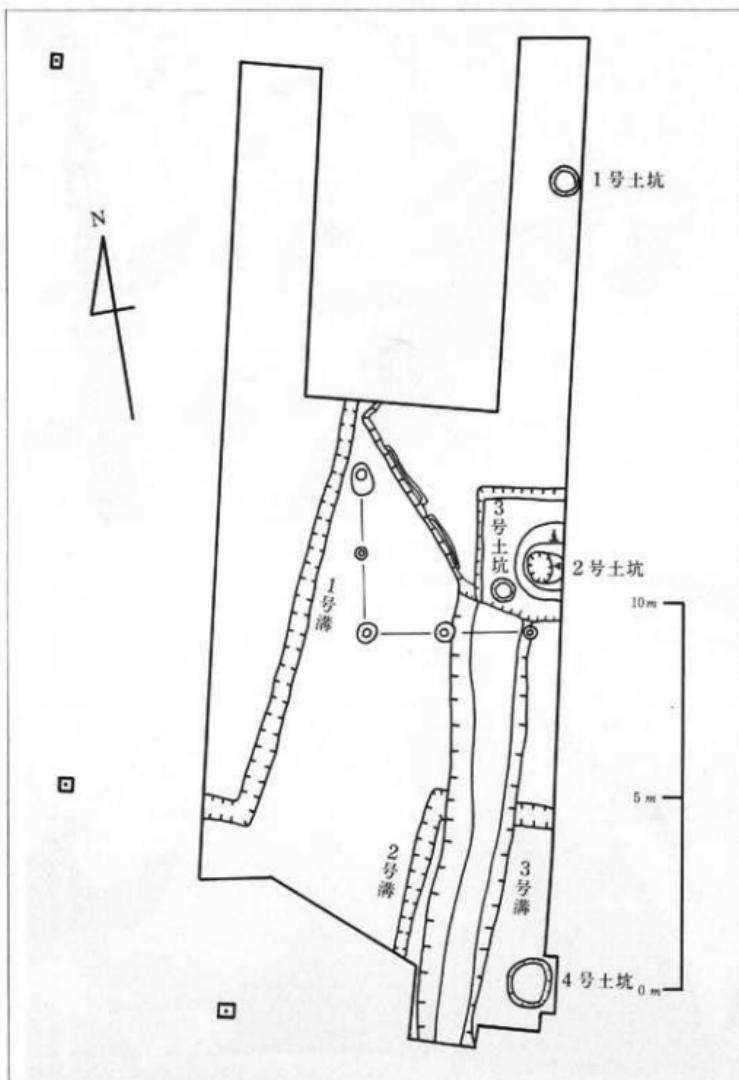
写真28 羽附陣屋跡・陣谷遺跡出土遺物



写真29 羽附陣屋跡・陣谷遺跡調査区中央部



写真30 羽附陣屋跡・陣谷遺跡 3号溝



第9図 羽附陣屋跡・陣谷遺跡遺構配置図

参考文献

- 館林市教育委員会 「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集～第22集」
館林市教育委員会 「茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集」
館 林 市 「館林市誌 歴史篇」
館 林 市 「館林市誌 自然篇」
館林市立図書館 「館林双書」
群馬県教育委員会 「群馬県の遺跡」
群馬県教育委員会 「群馬県遺跡台帳」
群馬県教育委員会 「群馬県の中世城館跡」
群馬県林務部 「群馬県の貴重な自然 地形・地質編」
群 馬 県 「群馬県史」
群 馬 県 「上毛古墳綜覧」
板 倉 町 「板倉町史」
大 泉 町 「大泉町誌」
山 崎 一 「群馬県古城墨跡の研究」

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 中塚印刷所

発行年月日 平成4年3月31日



吉野村樹脂
シーリングマーク
ふる郷の文化と歴史を守りなみそう